

## 「資 料」

## 第4回 IWA 役員会及び第3回 IWA メルボルン世界会議に出席して

竹 中 勝 信

日本水道協会研修国際部国際課長

## 1. まえがき

第3回国際水協会 (IWA) 世界会議・展示会が平成14年4月7日 (日) から同12日 (金) まで、初秋のオーストラリア・メルボルン市内にあるコンベンションセンターで開催され、最終日の4月12日 (金) には技術視察が10コースで実施された。出席者は、世界75カ国から1,792名 (事務局発表) が参集した。このうち、日本からの会議登録者は155名であった (表-1)。また、これと併行して水道事業管理者「CEO サミット」が前回のベルリン会議に引き続いて、世界会議の開会式の終了した4月8日 (月) 午後から翌日の午後8時まで開かれ、更に4月8日 (水) 午後12時30分から Asian Water Qual 及び ASPAC 評議会のジョイント・ミーティングが岡田広島大学教授の議長のもとで開催された。

世界会議に先立って第4回 IWA 役員会 (会長会議、理事会、戦略評議会、IWA 基金) がメルボルン展示場5階のクラレンドン・ルームなどで開催され、丹保放送大学長 (IWA 会長)、川北日本水道協会専務理事 (IWA 理事)、大垣東京大学大学院工学研究科長兼工学部長 (IWA 理事/戦略評議会メンバー)、渡辺北海道大学大学院教授 (IWA プログラム委員会メンバー)、松井東京都水道局水道特別作業隊長 (戦略評議会メンバー)、竹中日本水道協会国際課長 (IWA 基金メンバー) がそれぞれの会議に出席した。

表-1 IWA 世界会議の開催国、開催都市及び登録者数

回	年	開催国	開催都市	登録者
1	2000	フランス	パリ	3,000 (155)
2	2001	ドイツ	ベルリン	2,700 (196)
3	2002	オーストラリア	メルボルン	1,792 (155)

注) 括弧内の数字は日本人の会議登録者数

## 2. 第3回世界会議・展示会の概要

第3回世界会議は前述したように4月7日 (日) から同11日 (木) までメルボルン市のヤラ川の右岸に面したコンベンション・センターで開催式、セッションの口頭発表、閉会式が行われた。また、ヤラ川の左岸に面したメルボルン展示場では、展示会、ポスター発表、ランチ及びコーヒ・ブレイク会場として催された。

4月12日 (金) は終日、技術視察と別途 WHO 「飲料水基準のワークショップ」が IWA 世界会議と別会費で開催された。

今回の IWA 世界会議はエンバイロ2002 (ENVIRO 2002) との共催で開催されたため、開会式はまず合同で開いてから、再度 IWA だけの開会式が開催されるというスタイルがとられた。世界会議にはオーストラリアを中心に、オーストラリア、アルゼンチン、ブルガリア、バングラデシュ、ブラジル、ベルギー、バーレーン、カンボジア、アラブ首長国連邦、チリ、中国、エジプト、エリトリア、コロンビア、カナダ、チェコ、デンマーク、西ティモール、フランス、フィジー、フィンランド、ドイツ、ガーナ、香港、ハンガリー、インド、インドネシア、イスラエル、イラク、イラン、イタリア、日本、ケニア、カタール、韓国、キューバ、ベトナム、マケドニア、メキシコ、マレーシア、モーリシアス、モロッコ、モンゴル、メキシコ、オマーン、オランダ、ナウル、ニュージーランド、パラオ、ネパール、フィリピン、ポルトガル、ロシア、ルーマニア、南アフリカ、シリア、スリランカ、スイス、スワジランド、スロベニア、スロバキア、ノルウェー、シンガポール、スウェーデン、トンガ、タイ、台湾、トルコ、ウズベキスタン、ザンビア、英国、アメリカ合衆国、ジンバブエ、ベトナムなど世界75カ国・地域から

1,792名が出席し、技術情報の交換を行うとともに国際親善を深めた。

#### 1) 会議登録費

世界会議の事前登録は、平成14年1月31日まではIWA会員に対して1,295A\$ (約97,100円)、非会員に対して1,425A\$ (約106,800円)、学生と退職会員に対しては475A\$ (約35,600円)そして同伴者に対しては250A\$ (約18,700円)であった。しかし、当日登録ではそれぞれ1,425A\$ (約106,800円)、1,570A\$ (約117,700円)、475A\$ (約35,600円)、250A\$ (約18,700円)で学生・退職・同伴者は変わらなかった。

#### 2) ウェルカムレセプション

開会式の前夜に会議登録した出席者を対象にニコルソン通りにあるメルボルン博物館で4月7日(日)午後6時から8時まで、ウェルカムレセプションが開催された。会場にはドリンクと簡単なつまみが提供されてあったのでお互いに知人を見つけると握手をして飲みながら歓談されたりしていた。博物館には無料の市電で行きは各自行って、帰りは事務局で観光バスが用意された。

#### 3) 開会式

第3回世界会議の開会式は、4月8日(月)午前8時45分からジョン・バットマン・シアターで行われた。開会式ではまず場内にピアニストのシモン・テデッチ氏が紹介され、舞台正面に現れ頭を下げられてから「RHAPSODY IN BLUE」の曲を演奏された。テデッチ氏のピアノ演奏が終わると、場内にENVIRO 2002のジョン・パーカー組織委員会委員長が「このような素晴らしい世界会議を開催することができたのは、今日お集まりの皆様のお陰であり、大変感謝している。ぜひ、この会議に参加された皆様方一人一人が立派な成果を得られることを心から祈願する。」と開会の挨拶があった。

引き続きビクトリア州首相、ステーブ・ブラックス氏の祝辞があり、最後に、CSIROプログラム議長のグラハム・ハリス博士より、「エコロジーの足跡」と題してすばらしい基調講演をされ、第1部が終了した。

第2部は午前11時から始まり、まず最初に3人の男性による水道のショーがあって、オーストラ

リア水協会専務理事のクリス・デービス博士が舞台の右手に司会者として現れ、今回の会議会長であるデービッド・ガーマン氏を紹介、ガーマン氏は、この会議の準備に8年要したことなどを盛り込みながら歓迎の挨拶を舞台の左手でされた。

続いて、デービス氏がIWA会長の丹保憲仁氏を紹介すると会場から拍手が沸き起こり、壇上に上がった丹保会長は、「まず、水・エネルギー・人口を取り巻く地球規模の危機的状況について言及し、21世紀のキーワードとしてアクティブ・サステイナビリティを上げ、持続の可能性を積極的に目指すべきであると強調した。成長と開発は異なるものであると理解しなければならないとの指摘があった。一方、IWAについては、21世紀は水の世紀であるから、IWAは21世紀の鍵を握る組織となると高らかに言及した。そのために、実際に環境を守り、水を大切に使うのは個人の役割で、こうした人々の善意をまとめあげる具体的な計画を構築していくことが必要で、それがIWAの責務である」とIWA組織の21世紀の方向を会長として明確に示された後、去る4月6日(土)の理事会で次期会長に選出された英国のマイケル・ラウス氏を舞台に招き紹介した。これを受けてラウス次期会長は、「非常に名誉なことで、丹保現会長の後を受けてIWAの発展のために最大限の努力をしたい」と決意を披露した。その後、IWA会長は舞台に残られて恒例のIWA表彰式になり、受賞者にはメダルを手渡すためにミルバーン専務理事の秘書であったキッチンマン女史も舞台に上がられて表彰式が始まった。まず、前会長のカイナース氏、フード氏、パース氏、オデンダール氏の4名に「元会長名誉賞」が授与された(カイナース氏とフード氏はこの授与式には欠席)。続いて、名誉会員賞に移り、今回はこれまでIWA専務理事であったトニー・ミルバーン博士に授与され、35歳以下の研究者・技術者に贈られるヤング・プロフェッショナル賞(シャレカンパ賞)には地元オーストラリアのダニエル・ディア博士、個人会員・法人会員・協会会員がIWA事業に功績のあった者に贈られるIWAアウト・スタンディング賞(サミエル・ジエンキンス賞)にはオランダのティオ・マーティン氏、さらに

IWA の上下水道や科学分野において優れた貢献をした人に授与される「Dr. カール・イムホッフ / Dr. ピエレ・コック賞」には英国のテムズ・ウォーターのビル・アレキサンダー氏、そして今回初めて出版賞にオランダのワゲニンゲン大学のピエト・レイン博士が授与された。ピエト・レイン博士から受賞者を代表してスピーチがあり、そのスピーチが終わると会場から大きな拍手が上がった。

最後は新しく IWA 専務理事に就任した米国のポール・ライター氏とオーストラリア人の IWA 副専務理事、マーク・パスコ氏から就任の挨拶があって第2部の開会式が終了した。

#### 4) 展示会

第1部の開会式が終わると、展示会のオープニングセレモニーがあった。展示会には、世界の環境関連企業237社が出展した。中でも、ドイツ RWE の子会社になった英国のテムズ・ウォーターをはじめ、フランスのビベンディ、オンディオなどの国際企業が目立った動きを行い、その力を誇示していた。日本からは大阪府にある(株)ナガオカの1社だけが出展していた。これ以外にも日本と海外の合併会社が数社あった。

#### 5) 口頭発表/ポスター発表など

4月8日(月)午後2時30分から始まった科学技術プログラムでは、総合的水資源管理・水道経営と経済性・システム計画と管理・浄水処理・都市/工場廃水の処理・ユーティリティ管理と経済性・開発途上国におけるサービスの展望・健康関連汚染物質の管理の8分野について連日各9~16会場に分かれて口頭発表と43のワークショップ・パネルディスカッション・シンポジウムが繰り広げられた。4月10日(水)の午後2時30分からは IWA 副会長のひとりであるマイケル・ラウス氏の座長で開催された「水道システムのテロ対策等の危機管理」に関するワークショップでは、我が国から横浜市水道局建設部次長兼計画課長の久保田照文氏が口頭発表された。また、4月11日(木)には、IWA のニック・キング基金局長のもとで「IWA 基金フォーラム」も開催され、CEO サミットの一部のメンバーも助言者として参加された。分科会口頭発表論文数は最終的に全部で463題あつ

たが我が国からの口頭発表数はリザーブされていたものも含めて34題でそのテーマと著者は以下のとおりであった。また、口頭発表のセッションの座長に日本から元東洋大学教授の後藤圭司氏や北海道大学大学院教授の渡辺義公氏などが当たられた。

1. アマモの生存、形態に及ぼす流動・着生植物の影響  
玉置 仁 (広島大学大学院)、J. L. Gaeckle、B. S. Kopp、F. T. Short
2. 水処理プロセスの迅速で総合的な評価指標  
亀井 翼、M. Kang、H. Kim、佐藤 裕子、鎌田 基之、眞柄 泰基 (北海道大学)
3. 都市高速道路排水中の汚濁負荷の流出に関する影響因子  
新矢 将尚、鶴保 謙四郎 (大阪市立環境科学研究研究所)、小西 孝明 (松下環境空調エンジニアリング)、石川 宗孝 (大阪工業大学)
4. 干潟漂着油中の多環芳香族炭化水素類(PAHs)の生分解に及ぼす排水性液相 (NAPL) の影響  
小瀬 知洋、宮岸 章、向井 徹雄、滝本 和人、岡田 光正 (広島大学大学院)
5. 多環芳香族炭化水素及び変異原生から見た屋根流出雨水水質の流出特性  
奥川 光治 (富山県立大学)
6. 再生水により維持されている小河川における残留塩素濃度の減衰：札幌における調査研究  
船水 尚行、岩本 智成、高桑 哲男 (北海道大学)
7. 流域における渇水時の水資源供給のための確率論的研究  
巖 斗鎔、楠田 哲也 (九州大学)
8. 無薬注膜濾過洗浄排水の電解凝集濃縮  
黄 建元 (前澤工業)、内堀 利也 (埼玉大学)、藤田 賢二 (財)水道技術研究センター)
9. 信頼性をもとにした配水管網の最適設計法  
Aklog Dagnachew、細井 由彦 (鳥取大学)
10. 震災対応能力を強化した配水情報システムの構築  
林 秀樹、坂田 活之 (大阪市水道局)
11. 重金属トレーサーを用いた地下水汚染の解析

- ：ハノイ市のケーススタディ  
Tran Thi Viet Nga、井上 雅文、Khatiwada Nawa Raj、滝沢 智 (東京大学)
12. 低圧逆浸透膜による溶質分離における膜電位の役割  
尾崎 博明、寺島 泰 (大阪産業大学)、池嶋 規人、松井 三郎 (京都大学)、武田 真一、田里 伊佐雄 (岡山大学)、Li Huafang (山口大学)
13. UF膜ろ過における前凝集沈殿処理の評価  
張 洛、渡辺 義公、小澤 源三 (北海道大学)、峯岸 進一 (東レ(株)先端研究所地球環境研究室)
14. クリプトスポリジウムオーシストの除去指標としてのセネデスムスクアドリコーダの評価  
金 漢承、秋葉 道宏、国包 章一 (国立保健医療科学院)、小林 康宏 (厚生労働省)
15. 酸化処理と生分解処理の繰り返しによる溶存有機物の除去  
Fahmi、西嶋 渉、岡田 光正 (広島大学)
16. 多摩川河川水における励起蛍光スペクトルとトリハロメタン生成能  
中島 典之、花房 正英、古米 弘明 (東京大学)
17. 生物学的栄養塩除去プロセスにおける脱窒性脱リン細菌の役割の定量的評価  
庄司 仁、佐藤 弘泰、味埜 俊 (東京大学)
18. 栄養塩除去活性汚泥法における補食・死滅および群集動態の意義について  
Jacco L. Huisman、味埜 俊 (東京大学)
19. 下水生物処理プロセスにおける女性ホルモン物質の挙動  
恩田 建介、中村 由美子、宮 昌子 (株荏原総合研究所)、葛 甬生 (株荏原製作所)
20.  $17\beta$ -エストラジオールとその抱合体の活性汚泥による分解  
栗栖 太、田中 美奈子、矢木 修身 (東京大学)、松尾 友矩 (東洋大学)
21. 微小電極を用いた活性汚泥内の硝化機構の解明  
佐藤 久、中村 吉志、小野 秀樹 (八戸工業大学)
22. 膜分離活性汚泥法における余剰汚泥の直接自然乾燥  
上田 達己、端 憲二、本間 新哉、山岡 賢 (農業工学研究所)
23. オゾンを用いた活性汚泥法における汚泥減容化の基礎研究  
荒川 清美、葛 甬生、小林 琢也、田中 俊博 (株荏原製作所)
24. 異なる SRT における不織布分離活性汚泥法の処理能力と微生物動態  
Alavi Moghaddam、Yuntao Guan、佐藤 弘泰、味埜 俊 (東京大学)
25. 生活雑排水で汚濁した農業用ため池のケナフによる水質浄化  
青井 透 (国立群馬工業高等専門学校)、鈴木 学 (東京大学)
26. 銅添加培養された活性汚泥細菌が産出する重金属吸着タンパク質の分離に関する研究  
安附 太郎、佐野 大輔、大村 達夫 (東北大学)
27. 工業化学物質由来の内分泌攪乱化学物質による河川の汚染および環境リスク  
古武家 善成 (兵庫県立公害研究所)
28. 砂浜土壌への石油浸透の数値モデル作成  
下ヶ橋 雅樹、迫田 章義 (東京大学)、宮岸 章 (元広島大学)、小瀬 知洋、西嶋 渉、岡田 光正 (広島大学)
29. 雄のヒメダカ血清ピテロジェニン濃度を指標としたエストロジェン様物質の塩素処理によるエストロジェン様作用の変化  
田畑 彰久、宮本 信一、大西 悠太、伊藤 光明 (国土環境(株))、山田 卓、亀井 翼、眞柄 泰基 (北海道大学)
30. 既存の下水処理施設の改造による高度処理化  
小原 明 (横浜市下水道局)
31. 多摩川における付着藻類および底生生物への環境ホルモンの蓄積  
高橋 明宏 (東京都下水道局)、東谷 忠、玉本 博之、田中 宏明 (独立行政法人土木研究所)、斎藤 正義 (株環境科学コーポレーション)、矢古宇 靖子 (株神戸製鋼所)
32. 世界大都市水道料金の解析

呉 秀萍 (元埼玉大学)、黄 建元 (前澤工業(株))、滝沢 智 (東京大学)

33.  $k-\alpha$ モデルによる振動流下の生物膜への物質輸送のモデル化

長岡 祐、中埜智親 (武蔵工業大学)、秋本大賀 (株)日本水道設計社)

34. 活性汚泥による高分子有機物の除去動力学に及ぼす駆到期間の影響

生方 悠、恩田 新、滝井 進 (東京都立大学)

一方、ポスター発表がメルボルン展示場でランチとコーヒー・ブレイクの一角で行われ、総ポスター数449題のうち我が国が採択されたのは以下の41題であった。

1. 中海における赤潮の発生機構

南條 吉之 (鳥取県衛生研究所)、細井 由彦 (鳥取大学)

2. 合流式下水処理場におけるアルキルフェノールの動態解析

田中 修三、小川 明宏 (明星大学)

3. 水循環でのクリプトスポリジウム増殖防止のための下水処理によるコントロール

諏訪 守、鈴木 稔 (独立行政法人土木研究所)

4. 淀川表流水中に含有する生物同化可能有機炭素 (AOC) と凝集処理によるその削減効果

笠原 伸介、石川 宗孝 (大阪工業大学)

5. 良質な水道水供給のための高度な水質管理

伊佐治 知明 (名古屋市上下水道局)

6. フミン質の微量有機汚染物質の水系生物相への収着に及ぼす影響

松原 淳 (株)西原環境衛生研究所)、高橋 淳一 (栗田工業(株))、池田 和弘、清水 芳久、松井 三郎 (京都大学)

7. 下水道の普及による甲府市中小河川の水質変化

平山 公明、今岡 正美、平山 けい子、金子 栄廣、坂本 康 (山梨大学)

8. 連続観測データによる博多湾貧酸素水塊の機構に関する研究

熊谷 博史 (福岡県保健環境研究所)、鮎本 健治、楠田 哲也 (九州大学)

9. 高濃度粉末活性炭・精密膜ろ過システムにおける粒状物質および細菌の影響

M. M. Taimur Khan、大垣 眞一郎、滝沢 智、片山 浩之 (東京大学)、Han-Seung Kim (国立保健医療科学院)

10. エコサイクルマネージメントを活用した富栄養化湖沼の直接浄化

村上 和仁、奈良輪 真吾、石井 俊夫、瀧和夫 (千葉工業大学)、松島 眸 (日本大学)

11. 蛍光分析及び熱分析 GC/MS を用いた鉄系凝集剤による溶存有機物の除去特性評価

小松 一弘、古米 弘明、中島 典之、Phatta Bahadur Thapa (東京大学)、三木 理 (株)新日鉄)

12. 日本における個別循環型中水利用システムの現状

山縣 弘樹、小越 眞佐司、尾崎 正明 (国土交通省)、鈴木 稔 (独立行政法人土木研究所)、浅野 孝 (カリフォルニア大学)

13. 河川上流部でアルカリ性ホスファターゼは変動しているか

広谷 博史、越智 一希、中川 歩 (愛媛大学)

14. 埋立てから取り残された自然干潟の生態系バランスに与える環境構成因子の影響

石井 裕一、村上 和仁、瀧和夫 (千葉工業大学)、立本 英機 (千葉大学)

15. ポリプロピレン濾過による路面排水処理の研究

木村 定勝 (株)ホクコン)、松井 三郎、清水 芳久、李 炳 (京都大学大学院)、新矢 将尚 (大阪市立環境科学研究所)

16. 微小電極を用いた下水生物膜内の硫化水素生成に及ぼす硝酸塩および亜硝酸塩の影響

岡部 聡、伊藤 司、渡辺 義公 (北海道大学)、佐藤 久 (八戸工業大学)

17. 水生植物 (マコモ) と石炭灰ゼオライトを組み合わせた水質浄化システムによる栄養塩除去

江成 敬次郎、小濱 暁子、中山 正与 (東北工業大学)、中嶋 正行、Chanwoo Lee (元東北工業大学)

18. 酸化消毒副生成物から生じるイオンクロマトグラフ質量分析計による一斉分析

- 浅見 真理 (国立保健医療科学院)、関口 益男 (水道機工(株))、井上 嘉則 (日立化成工業(株))、相澤 貴子 (国立保健医療科学院)
19. 炭酸ガスを利用した余剰汚泥の浮上濃縮  
藤崎 一裕、Medhat El-zahar (九州工業大学)
20. 微流速を伴う閉鎖性水域の FE 流況解析  
森 郁平、矢内 栄二、瀧 和夫 (千葉工業大学)
21. 凝集剤添加型リン除去法における下水汚泥からのアルカリ処理によるリンおよび凝集剤の回収について  
加藤 薫 (三機工業(株))、桃井 清至 (長岡技術科学大学)、斉藤 昌明 (助長野県下水道公社)、田代 幸雄 (長野県諏訪建設事務所)
22. オゾン処理余剰活性汚泥の嫌気性消化  
Rajeev Goel、徳富 孝明、安井 英斉 (栗田工業(株))
23. オゾン前処理・後処理による嫌気性消化の性能向上  
Rajeev Goel、安井 英斉、柴山 千寿 (栗田工業(株))
24. 下水汚泥焼却灰からの有害元素の生物学的溶出法  
伊藤 歩、山田 浩司、佐々木 久美子、相澤 治郎、海田 輝之 (岩手大学)
25. オゾン処理による下水処理水中内分泌攪乱化学物質の除去  
神谷 俊行、山内 登喜子、広辻 淳二 (三菱電機(株))、藤田 正憲 (大阪大学)
26. 下水処理水に曝露したコイ (Cyprinus carpio) におけるエストロゲン作用の研究  
東谷 忠、玉本 博之、田中 宏明 (独立行政法人土木研究所)、高橋 明宏 (東京都下水道局)
27. 分画手法を用いた河川水及び下水処理水のエストロゲン様活性の評価の検討  
高橋 明宏 (東京都下水道局)、斎藤 正義 (株環境科学コーポレーション)、矢古宇 靖子 (株神戸製鋼所)、玉本 博之、宮本 宣博、東谷 忠、田中 宏明 (独立行政法人土木研究所)
28. オゾン汚泥減容化の膜分離法への適用  
小林 琢也、荒川 清美、田中 俊博 (株式会社 荏原製作所)
29. 膜分離併用白色腐朽菌リアクターによる色度および内分分泌攪乱物質の処理  
藤田 正憲、池 道彦、楠 和隆、上野 隆央 (大阪大学)、芹沢 佳代、平尾 智彦 (株タクマ)
30. 物質の形態変化に注目した下水管及び下水処理施設の統合モデル  
Jacco L. Hutsman、Peter Krebsc、Willi Gujera (東京大学)
31. 除草剤 CNP の微生物分解代謝物の変異原性への寄与  
松下 拓、松井 佳彦、佐久間 智、井上 隆信 (岐阜大学)
32. 多環式芳香族炭化水素類のリポソームへの収着に及ぼす構成リン脂質の影響  
小栗 拓也、川田 篤史、池田 和弘、清水 芳久 (環境質制御研究センター)、松井 三郎 (京都大学)
33. 前凝集・生物膜ろ過プロセスによる下水の高度処理の開発  
日高 平、津野 洋、岸本 直之 (京都大学)、林 敬昊 (韓国国立公州大学)
34. LCA-CO2から見た下水汚泥の熱固形化プロセスの評価  
奥野 長晴、石川 義紀、安藤 慶一郎 (滋賀県立大学)、河村 康利 (中外炉工業(株))
35. 低圧で原虫除去可能な大孔径精密ろ過膜システムの開発  
平田 強、森田 重光、滝澤 博美 (麻布大学)、神保 吉次 (水道機工株式会社)、小松 賢作 (株クラレ)
36. 浄水処理過程中的ダイオキシン類の生成起源及び水処理効果  
金賢求、正木 広志、亀井 翼、眞柄 泰基 (北海道大学)、松村 徹 (国土環境(株))
37. 浄水技術、環境技術および情報技術の総合化：尼崎浄水場のリニューアル  
花元 隆司、長塩 大司、佐々木 隆 (阪神水道企業団)
38. 砂ろ過による処理水濁度の低減化に関する

## 新技術

海老江 邦雄、李 宰昊、東 義洋 (北見工業大学)

39. 二酸化チタン固定化光触媒のゼータ電位が水中有機物質の分解速度に及ぼす影響

今泉 圭隆、片山 浩之、大垣 眞一郎 (東京大学)

40. 浄化槽活性汚泥へのポリオウイルスの吸着と脱離

中嶋 睦安、上床 和弘、小林 謙介、藩 英仁、岩淵 範之、砂入 道夫 (日本大学)

41. オゾン・AOP 処理による環境ホルモン類およびダイオキシン類分解に関する研究

中川 創太、剣持 由起夫、堤 かおり、田中 俊博 (株) 荏原製作所)、平沢 泉 (早稲田大学)

IWA の水管理政策評議会 (MPC) と科学技術評議会 (STC) の両評議会を設置されてきた各スペシャリスト・グループの会合が個別に4月8日 (月) の午後0時45分から4月10日 (水) の午後6時まで1~2時間開催され、その一部は公開で開催された。

## 6) コンgressディナー

4月10日 (水) の午後7時から展示場ホールのロビーでウエルカムドリンクがスタート、それから約20分間経過してマーチング・バンドによる参加者の歓迎が始まって7時30分にディナー会場のドアが開けられて参加者がそれぞれのテーブルに着席。ディナーパーティは8時から始まったが途中に異例ともいえる英国のチームズ・ウォーターの CEO であるビル・アレキサンダース氏がスポンサーを代表して挨拶があったり、楽団演奏をバックに歌手が次々に出てきて歌ったりして深夜11時30分過ぎに終わった。

## 7) 閉会式など

閉会式はすべての口頭発表が終了した4月11日 (木) の午後4時15分から閉会式と同じ場所で正面スクリーンに「第3回世界会議」と写し出されるなか開催された。今回の司会は新しく IWA の専務理事に就任したポール・ライター氏が勤めた。

まず、「自分はミルバーン博士の代わりに新しく IWA の専務理事に就任した」ことを語って、舞台にデービッド・ガーマン会議会長の挨拶を求めた。ガーマン会議会長は「これまで開催されたパリ、ベルリン世界会議よりも素晴らしい世界会議だったでしょうと自慢するとともに、この世界会議に協力してくれた多くのスポンサー、組織委員会の皆さん方、さらに参加してくれた皆様方にも素晴らしい思い出で新しい友好の場を持たれたことと思います」と語られると正面スクリーンに「みなさん、有難うございました」と写し出されるとガーマン会議会長は舞台にオーストラリア水協会の会長であるバリー・ノーマン氏に挨拶を求め、彼の挨拶の最後にキム・フエルグソン女史に「ヤング・ウォーター・サイエンス2002賞」と IWA の副専務理事で、これまでこの世界会議を準備してくれたマーク・パスコ氏に対して授与式をして舞台を降りた。ガーマン会議会長は、今度は舞台に来年4月にオーストラリアのパース市で開催するオーストラリア水協会の年次大会の会長であるバリー・サンダース氏を舞台に上がって挨拶するように求めた。すると、正面スクリーンに「オーストラリア2003パース年次大会」と写し出され、その後、サンダース氏の挨拶中にパース市の観光ビデオを映写して事前 PR を行った。

続いて、司会者であるライター専務理事は、IWA で長年仕事してくれたトニー・ミルバーン元専務理事とキッチンマン元秘書を舞台に上がらせるとともに丹保会長、さらにピート・オデンダール前会長、カリフォルニア大学の浅野名誉教授、ラズロ・ソムリオディ副会長も舞台に上がらせてミルバーン博士とキッチンマン女史にそれぞれから退任のお礼の言葉を述べられた。それからミルバーン博士とキッチンマン女史に対して IWA から記念品の贈呈があってから両氏から返礼の辞を受けた。

以上のようなセレモニーの後、ライター氏は、丹保会長に閉会の挨拶を求めた。丹保会長は「素晴らしい世界会議であった。これも会議会長として立派に役目を果たしてくれたガーマン会議会長のお陰である。本当に有難うございました。IWA は世界のウォーター・スペシャリストをメ

ンバーとして業務している国際機関である。これからは特に若いウォーター・スペシャリストのIWAでの活躍を心から期待したい。そして最後にIWA会長として次の2つのことをIWAの中でお願いしたい。そのひとつが文化の違いを越えて一致団結してグループでIWAを盛り上げていくこと。それから、もうひとつはIWA会員の多くが英語を母国語としていないのであらゆるIWAの会議の場ではゆっくり、明確にしゃべっていただきたい」と語った後、ガーマン会長に「IWA前会長」と金メッキされた紋章を左の胸元につけられた。続いてガーマン前会長が舞台で次の世界会議の開催地であるマラケッシュの会議会長(会議会長が所用で不在であったのでモロッコ代表のアゼデン・ベラダ・ソウンニ氏)との間で引継式が挙行され、1998年のIAWQバンクーバー世界会議から続いているトーキング・ステイクをガーマン前会長からソウンニ氏に手渡されて、ソウンニ氏が挨拶に立ち「今回のメルボルン世界会議はすばらしかった。次の世界会議も早速論文募集からはじめるので、多くの参加をお願いしたい」などと語った後、ショータイムに入りヘソダンスが披露されるとともにモロッコの観光ビデオが放映されて閉会式を終えた。その後、閉会式に出席された参加者の多くは場所を3階のエンバイロ2002閉会式会場であるMCCベラリン・ルームに移りフェアウエルドリンクとなった。

#### 8) 技術視察(各自負担)

今回の世界会議の技術視察には10のコースが用意されていた。そのうち浄水場の視察が含まれたコースは、セントラル・ハイランド水道公社(CHW)が管轄するバララット地区の水源涵養地域/ホワイト・スワン浄水場視察とメルボルン・ウォーターの水源/ヤン・イーアン浄水場視察の2コースだけであった。ここでは日本水道協会の川北専務理事と澤井主事が視察した前者のバララット地区の水源涵養地域/ホワイト・スワン浄水場視察の概要、それから竹中国際課長自ら視察した後者のヤン・イーアン浄水場視察についてその概要を以下に記述する。

なお、このヤン・イーアン浄水場は英国の大手エネルギー会社のユナイテッド・ユティリティ社

がオーストラリアで最初にBOOT契約で建設した浄水場で総工事費2,500万\$ (約30億円)、契約期間は25年となっている。

#### A. バララット地区の水源涵養とホワイト・スワン浄水場

この技術視察コースは、浄水場視察などの後にディナーショーが組み込まれ、午後11時30分に終了する予定のものであった。しかし、日水協主催ツアーのAコース参加者とともに午後7時30分発の飛行機でシドニーに向けて移動することになっていたため、事前に会議事務局とコンタクトし、午後3時に浄水場視察を終えて空港に直行する手配をしてもらい参加した。

##### a) バララット地区の水源涵養

約35haの広大な牧草地と農地に住宅が散在している。周囲には水源涵養のための松、ユーカリ、オリーブ、ゴムといったような比較的乾燥に強い樹木が多数植えられていた。周囲は火山地帯のため土壌は肥沃で、植物は育ちやすいとの事であったが、定期的に焼き畑を行い、牧草地としての利用とジャガイモなどの栽培用の農地としての利用を交互に行っている。地区の水道公社であるセントラル・ハイランド・ウォーター(以下CHWという)は、この地域の農家に羊の放牧に必要なフェンス等を提供する代わりに、農家にある程度の水源管理義務を課しているということであった。この地域一帯は農業地域に指定されており、新たに住宅を建築することはできないことになっている。周囲には多くの貯水池があったが、その多くは渇水のため貯水量が非常に少なく、そのうちの1つであるラルラル貯水池では、有効貯水量6,000万 $m^3$ の約3分の1程度の貯水量であった。

##### b) ホワイト・スワン浄水場

この浄水場は、もう一つのラルラル浄水場ともドイツ大手のエネルギー会社RWEの傘下である英国のチームズ・ウォーターがBOOT方式で建設、2000年11月から稼働したもので、標準処理能力は65,000 $m^3$ /日である。契約期間は前述したように25年となっているので、2025年にはこの浄水場はCHWに移管される。

浄水処理は、気泡により凝集フロック及び浮遊物を浮上させて分離する溶解空気浮上法を採用し



ており、消毒は塩素とアンモニアを同時に注入して塩素の臭気を抑えるクロラミン処理であった。CHWの給水人口は現在約112,000人、給水戸数は60,801戸で、そのうち商業/工業用が4,367戸である。また、配水管の総延長は約2,034kmで、配水池が46カ所築造されて浄水場は全部で4つ、これ以外に11の井戸があって塩素消毒のみにて給水しており、昨年度のCHWの平均給水量は44,553m<sup>3</sup>/日であった。

#### B. メルボルン・ウォーターのヤン・イーアン浄水場

ヤン・イーアン浄水場はメルボルン・ウォーターにある67の浄水場のひとつである。67の浄水場のうちウイネケ、クレスウエル、フラッグレイ浄水場とこのヤン・イーアン浄水場を含めた4浄水場が通常の急速濾過処理して給水、残りの63の浄水場は原水水質が良好なので塩素か紫外線で消毒、フッ素添加、pH調整だけで給水している。

メルボルン・ウォーターの近代水道の始まりは1857年で現在約300万人に約1,018kmの配水管を經由して約130万m<sup>3</sup>/日の水道水を給水している。また、隣接しているヤラ・バレイ・ウォーター、シテイ・ウエスト・ウォーター、サウスイストウォーターの3水道会社にも水道水を供給している。ヤン・イーアン浄水場の概要は以下の通り。

##### a) 水源

水源はヤン・イーアン貯水池(有効貯水量3億m<sup>3</sup>)で貯水池に築造された取水塔から自然流下で浄水場の着水井に流入。

##### b) 浄水処理

湖水水質が比較的的良好なのでマイクロフロック法で処理している。すなわち、取水した原水に硫酸バンドと高分子凝集剤、pH調整として石灰を注入してフロック形成させて複層濾過池(11m×6.1m-10池)で10.3m/時の濾速で濾過、その後、濾過水にフッ素と塩素を注入して配水池に流入している。濾層構成は濾過砂20cmとアンストラサイト1.5mで、洗浄は空気と水の併用洗浄(空気60m/時-2分、その後空気60m/時と水25m/時-3分、最後に水60m/時-5分)で、その洗浄指標は損失水頭1.8m、濾過時間24時間、濾過水濁度0.5NTUの3つを指標にして行っている。

##### c) 配水

配水池は直径69.3m、高さ12mの円錐形で、有効容量は40,000m<sup>3</sup>。メルボルン市内には前述したように配水管(50~1,200mm)が約1,018km敷設され、その90%が鋼管で、これ以外に鑄鉄管、ポリエチレン管を使用している。市内には55の配水ポンプ場がありその総配水池容量は182,500m<sup>3</sup>である。

##### d) 水道料金及び使用水量

オーストラリアにおいては通常、水道事業者はメーターによって水道料金を徴収している。メルボルン市の家事用水は3ヵ月毎に検針して3ヵ月毎に水道料金を徴収しているが、現在の水道料金は1988年1月からの料金体系で71セント/m<sup>3</sup>、また下水道が81セント/m<sup>3</sup>となっている。水道料金は今年7月に料金値上げされる予定になっている。1人1日当たり使用水量は現在430リットルである。

#### 9) 同伴者プログラム/ポストコンGRESS・ツアー

ポストコンGRESS・ツアーは今回の世界会議では特別に設定されなかった。同伴者プログラムは通常の観光ツアーではなく4月8日(月)の午前11時15分から国際会議場のペラリン3で「シャンペーンによる集い」と展示会場で連日「紅茶とコーヒー」が振る舞われた。

#### 3. 第4回IWA役員会の概要

第3回IWAメルボルン世界会議が開催されるのに併せて第4回IWA役員会が4月3日(水)から7日(日)までメルボルン展示場5階のクラレンドルーム等で開催された。4月3日(水)は午前9時から終日「会長会議」、4月4日(木)は午前9時から正午まで「IWA基金」と午前9時から午後7時まで「戦略評議会」が開催された。そして4月5日(金)は終日、理事会として各国の国内委員会代表によるIWA国内委員会を、さらに4月6日(土)は同じく終日、理事会が開催され、最終日の4月7日(日)は会長会議・理事会・戦略評議会・基金の役員メンバー及び同伴者、さらにIWA本部職員と名誉会員などで役員視察旅行が行われた。以下に今回の役員会の概要を記述する。

## 1) 会長会議 (Executive Committee Meeting)

IWA 世界会議開催時に併行させて必ず開催される IWA 役員会の初日は会長会議で、今回は4月3日(水)の午前9時から午後5時までメルボルン展示場5階のクラレンドンルームで開催された。

前回の会長会議から会長会議のメンバーが従来の14名から減り丹保会長の他にオデンダール前会長、バース前会長、ソムリオデイ副会長、ラウス副会長、ガーマン2002メルボルン会議会長、ヘンツ出版委員会議長、ギルバート PC 議長の8人。IWA 事務局からミルバーン元専務理事、ライター専務理事、パスコ副専務理事、ゲン IWA 出版局長、キング IWA 基金局長、キッチンマン元秘書、中野秘書が出席。なお、会長会議のメンバーであったシェラー財務官はベルリン会長会議以降に引退され、財務関係はラウス副会長が引き継がれた。丹保新会長によるメンバーの新しい職務は以下のようになっている。なお、会議会長はメルボルン世界会議以後はモロッコの Ali Fassi Fihri 氏に変わる。

会長 丹保 憲仁 (放送大学学長)

副会長 戦略評議会議長 Laszlo Somlyody  
(ハンガリー/ブタベスト大学教授)

副会長 財務担当 Michael Rouse (英国/Head of the Drinking Water Inspectorate)

前会長 基金担当 Vincent Bath (南アフリカ/  
Chief Executive of the Rand Water)

前会長 Piet E. Odendaal (南アフリカ/Chairperson of the Water Research Commission)

会議会長 David Garman (オーストラリア/  
CRC for Waste Manage. And Poll. Cont.)

プログラム委員会議長 Jerome B. Gilbert (米国/  
コンサルタント社長)

出版委員会議長 Mogens Henze (デンマーク/  
デンマーク工科大学教授)

会長会議は IWA の首脳会議で代理出席は認められず、また非公開で、わが国から丹保会長しか出席できないのでその詳細についてはわからない。今回の会長会議の議題は以下のような項目でこれまでの会長会議の議題とはがらりと変わった議題となっていた。

1. 丹保会長の開会の辞
2. 前回の会長会議 (平成14年1月21日~22日、於ロンドン) の議事
3. ガーマン会議会長からメルボルン世界会議及び同財政報告
4. パスコ氏から第3回メルボルン世界会議のテクニカル・プログラムとキー・メッセージ
5. IWA の各役員会のレビュー及びその各役員会と会長会議の係わりについて
  - ・スペシャリスト・グループ・ミーティング
  - ・戦略評議会
  - ・IWA 国内委員会
  - ・理事会
6. IWA ロンドン事務所
  - ・パスコ副専務理事の着任
  - ・管理体制
  - ・表面に出てこない業務結果の見直し方
  - ・コミュニケーション
  - ・戦略プランの実施
7. 2002年~2004年の3カ年予算案
  - ・市場マーケットと予想収入
  - ・正会員の年会費減らすこと
  - ・支出内容と新しい賃借内容
  - ・望ましい理事会の運営
8. 年会費改定プロセス
9. 定款と細則の改定
10. IWA 基金の改革と京都世界水フォーラムについて
11. 他の国際機関と IWA との契約締結
  - ・交渉と締結の歴史的な背景
  - ・GWRC, EWA
  - ・AIDIS と現在進行中の契約内容
  - ・同意しつつある契約プロセス
12. 新たに毎年 'Leading Edge' 会議を開催する提案
  - ・ 'Leading Edge' 会議のテーマ
  - ・準備中の特別会議
- 1) Sustainability in the Water Sector
  - ー今年11月にイタリアの Venice で開催予定
- 2) Water Treatment Technology (仮称)
  - ー来年、オランダの Amsterdam 市で開催予定
13. 2008世界会議の開催場所

## 14. IWA と IWAP との連携

- ・戦略
- ・予算

## 15. その他

## 16. 次回の会長会議—平成14年11月21日—22日、イタリアのベニス市

以上のような内容であったが、会長会議終了後、丹保会長からその内容の一部を聞いた。それによると今回は専務理事がミルバーン博士からライター氏に変わったので、ミルバーン博士がこれまで取ってきた IAWQ のやり方を徐々に取り払って新しい IWA として活動するようにした。とのことであった。

なお、IWA 会長会議はメルボルン世界会議開催中の4月11日(木)の午前7時から8時にかけても開催された。

## 2) IWA 基金

IWA 基金は4月4日(木)の午前9時から正午までメルボルン・コンベンションセンター1階の MCC ホウクア4ルームで開催された。オランダのマーティン氏が前回のベルリンで開催された IWA 基金で議長を会長会議のメンバーのひとりであるバース前会長に譲られたために今回の IWA 基金はバース氏が初めて議長された。IWA 基金には我が国から竹中国際課長が出席した。

今回の IWA 基金では、まず、恒例により自己紹介からスタートして前回、10月9日にベルリンにおいて開催された IWA 基金の議事録の内容確認が行われ承認された。続いてニック・キング IWA 基金局長から昨年のベルリン以後の事業活動報告が行われた。すなわち、ワークショップは、昨年10月以降3つ実施してきたこと。その3つとは、1つがザンビアの CEO フォーラムで、スタッフの再編成・メーターの設置・ウォーター・キオスク(給水場)・水質保護に関する内容でザンビア水道衛生協会と南アフリカのランド・ウォーターの協力も得たこと。2つ目はエクアドルで将来のトレーニング・セッションに利用できるようにクインランド大学のポール・ラント教授とボブ・バカン教授の協力を得てスペイン語の浄水処理の資料を作成したこと。そして、3つ目は今年2年にガボンで開催した水道事業評価であった。また、

プロジェクトは、ザンビアで建設中のウォーター・キオスクとブラジルで順調に進んでいる小規模水道のオペレーター研修プロジェクトで後者は今年6月で終了する予定である等が報告された。さらに、世界銀行とオランダ信託基金と提携して南アジア水道事業体の水道事業評価に関する支援、日本財団から IWA 基金事業に対する資金援助申請、「Water21」の今年2月号に水に関する技術情報サービスに関するボランティア募集をして現在まで約50名のボランティア登録をしてもらった。ような内容の報告もあった。最後は、4月6日(土)の IWA 理事会の議題になっている「IWA 基金の戦略的イニシアティブ」に関する議論とその IWA 基金としての理事会資料についてであった。なお、昨年11月に上海の同済大学で実施した「日中水処理シンポジウム」も IWA 基金の協賛であったので、その内容がキング氏から報告されなかったのでそのシンポジウムの内容を竹中国際課長の方から報告があった。

「IWA 基金の戦略イニシアティブ」の議論に入る前に、なぜこの問題が出てきたのか?についてキング氏から「IWA 基金については IWSA 研修基金と IAWQ 開発基金の両方の事業を強化するために IWA の合併と同時に発足してきて3年になるが、ベルリンの IWA 理事会で IWA の新しい戦略全体を見直しに入ったので IWA 基金事業についても見直す必要がでてきて、4月6日(土)の IWA 理事会に同基金の戦略イニシアティブを提案して承認してもらったためである」と説明があった。その提案資料は、1) これまでの背景を含めたまえがき、2) IWA 基金のこれまでの事業実績、3) 新しい戦略、4) 提案、5) あとがき。とすることになり、そのうちの1)と2)はこれまでのことなので特に議論はしなかった。3)の戦略では、今後、IWA 基金の事業を IWA に密着させるようにする。具体的には、IWA 基金活動をさらに IWA に密着させて、低所得国で基金が IWA を代表したものとし、さらに IWA 会員の地域国内委員会のネットワークが直接支援できるようにする。現地からの要望を基盤にして IWA との長期的な関係を発展させ、その影響力を確実に維持できるようにする。などを主体とした表現とするこ

とに決まった。4)の提案ではふたつあって、そのひとつが地域的なネットワーク、すなわち IWA で現在出来上がっている ASPAC (Asian Water Qual も含む)、南米、北アフリカ、中部・南部アフリカ、ヨーロッパといった地域の国内委員会をフルに活用して IWA 基金の事業にする。言い換えれば、このような地域グループの IWA メンバーはその地域の問題を一番よく知っているので解決策を把握して実行できるばかりでなく、資金も確保し易いので IWA 基金は現地の効果的な解決策を確立しながら、各グループの IWA 会員及び他の多くの人々の間で長期的なネットワークが形成するように支援する。もうひとつは IWA 会員が自分の知識と経験を低所得国の水問題に貢献してもらうように IWA が支援する。といった内容にすることが決まった。理事会資料はキング氏が作成するとともに、4月5日(金)の国内委員会や4月10日(水)の Asian Water Qual と ASPAC 評議会の合同会議にはキング氏も出席して前述の提案説明もしたいと言われ承認された。

### 3) IWA 戦略評議会

IWA 戦略評議会(SC)は4月4日(木)の午前9時から午後7時までメルボルン展示場のクラレンドンルームで開催された。

IWA 戦略評議会は科学技術評議会(STC)と水管理政策評議会(MPC)が統合されたもので、今回は新しく選抜されたメンバーによって初めての SC で我が国からは大垣東京大学大学院工学研究科長兼工学部長と松井東京都水道局水道特別作業隊長の2名が出席された。IWA 側からは丹保会長、ソムリオディ副会長、ライター専務理事などが出席された。今回の SC では、① IWA の立場をはっきりさせるポジションペーパーの作成、②戦略計画の作成、③スペシャリストグループの運営、④水道事業体・産業界・大学など各分野ごとのボランティアグループの立ち上げ—等について今後詳細な議論に入ることを決めた。

### 4) 各国の IWA 国内委員会会議

各国の IWA 国内委員会会議が IWA 理事会の一環として4月5日(金)の午前9時から午後6時までメルボルン展示場5階のクラレンドンルームで開催された。IWA 国内委員会会議には我が国

からは、日水協の川北理事と北大の渡辺日本国内委員会事務局長の2名、IWA 側からは丹保会長、ライター専務理事、キング IWA 基金局長などが出席され、オブザーバーとして竹中国際課長と澤井主事も同席することができた。今回の IWA 国内委員会の概要を以下に記述する。

IWA 国内委員会の件についてはベルリンの理事会でも、IWA と各国国内委員会の役割・責任・特権、さらに各国国内委員会とその国の協会との役割についてもあいまいになっていることが指摘され、正会員の会費の割に IWA の特権がないことからその会費の値下げも議論されて平成14年度の会費もメルボルンの理事会が終わるまで請求しないことになっていた。そして会費については企画委員会を発足させてメルボルンの役員会にその提案書を出すことになっていて前前日の会長会議にもその資料がでてきた。

今回の IWA 国内委員会には、アルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ブラジル、ブルガリア、カナダ、中国、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、香港、ハンガリー、イスラエル、日本、韓国、マレーシア、モロッコ、ニュージーランド、ノルウェー、ポルトガル、スロベニア、南アフリカ、スペイン、スワジランド、スウェーデン、英国、米国の28の地域/国から出席があった。そして、IWA 国内委員会は丹保会長の「開会の辞」から始まった。続いて、ライター専務理事が「IWA 国内委員会の責務は自国の IWA 会員の意見を良く聴取して IWA に反映できるように自国の IWA 会員との協議の場を構築することで IWA の細則に明記するように考える。また、IWA としては現在、北ヨーロッパ・南ヨーロッパ・アジア太平洋・アメリカ・アフリカの5つの地域連合があるが、その活動状況・それぞれの文化も違うのでその内容は同じでなくてもよいと考えている。大切なことは、各国国内委員会の代表が変わってもその後に同じ体制が続くようにすることが大切である。」と明言。その後、今回の国内委員会に出席した地域/国に対して以下のような項目について電子アンケートされた。

#### 1. 国内委員会を置くことについてどう思うか?

Strongly Disagree

0

Disagree	0	Strongly Disagree	8.1%	
Neutral	15.0%	Disagree	13.5%	
Agree	42.5%	Neutral	16.2%	
Strongly Agree	42.5%	Agree	32.4%	
2. 戦略問題などに国内委員会がもっと積極的になることについて?		Strongly Agree	29.7%	
Strongly Disagree	2.3%	7. IWA 基金の事業をもっと地域の国内委員会に?		
Disagree	14.0%	Strongly Disagree	2.7%	
Neutral	20.9%	Disagree	5.4%	
Agree	32.6%	Neutral	16.2%	
Strongly Agree	30.2%	Agree	43.2%	
3. 理事会で代理投票できるようにすることについて?		Strongly Agree	32.5%	
	1回目	2回目		
Strongly Disagree	13.6%	15.0%	8. 法人会員の会費を会社の規模に応じて額を変える?	
Disagree	13.6%	10.0%	Strongly Disagree	2.7%
Neutral	12.3%	10.0%	Disagree	5.4%
Agree	36.4%	40.0%	Neutral	5.4%
Strongly Agree	22.7%	25.0%	Agree	40.5%
4. 理事会に誰でも出席できるようにすることについて?			Strongly Agree	45.9%
Strongly Disagree	20.5%		9. 代理投票ができるように理事会の小グループで検討することについて?	
Disagree	20.5%		Strongly Disagree	9.1%
Neutral	15.4%		Disagree	6.1%
Agree	23.1%		Neutral	15.2%
Strongly Agree	20.5%		Agree	39.4%
			Strongly Agree	30.3%
このようなアンケートがあった後、ランチ・ブレイクに入った。午後一番に各国国内委員会と IWA 地域グループの強化と IWA が果し得る役割、IWA 基金と地域の国内委員会との関わりを強化していくことについてライター専務理事から説明があって、引き続いて IWA の年会費について企画委員会が作成した提案書にそって議論して最後に以下の電子アンケートがあった。			以上のようなアンケートがあって最後に丹保会長から IWA の支出を詳細に精査して皆さんには明らかにするので会費提案については承認して欲しいと言われ、全会一致で承認された。	
5. 正会員の会費を単一にすることについて?			5) 理事会 (Board Meeting)	
Strongly Disagree	11.1%		IWA 理事会は前日の IWA 国内委員会の翌日、4月6日(土)の午前9時からメルボルン展示場5階のクラレンドルームで開催された。今回の理事会には我が国からは、日水協の川北理事と東大の大垣理事が出席された。オブザーバーとして竹中国際課長、澤井主事、戦略評議会のメンバーのひとりである東京都水道局水道特別作業隊長の松井氏も同席できた。理事会の概要について以下に記述する。	
Disagree	5.6%		a) 開会の辞	
Neutral	13.9%		丹保会長の「開会の挨拶」に引き続いて議事に	
Agree	36.1%			
Strongly Agree	33.1%			
6. 正会員の会費を国によって変えることについて?				

入った。

b) 前回理事会の議事録の承認

昨年10月11日～12日にわたってドイツのベルリン市で開催された前回理事会の議事録の内容確認が行われ承認された。

c) IWA 次期会長選挙

選挙に入る前にライター専務理事から出席している正会員の確認が行われた。出席した理事国はモロッコ、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、カナダ、オーストラリア、フィンランド、韓国、ブルガリア、オーストラリア、ルーマニア、オランダ、ベルギー、トルコ、スイス、ニュージーランド、スワジランド、シンガポール、イスラエル、アルゼンチン、ドイツ、イタリア、マレーシア、フランス、ルーマニア、日本、台湾、スペイン、香港、南アフリカ、メキシコ、英国、米国、スロベニア、イスラエルの35の地域/国であった。

次期 IWA 会長選挙はまず立候補しているハンガリーのソムリオディ氏と英国のラウス氏の方から3分間の立候補表明、それから質問に答える事務作業があって投票に入った。投票は電子投票なのですぐに結果が判明した。投票結果は下記の通りラウス氏が当選した。

ソムリオディ氏	44.4%
ラウス氏	55.6%

当選したラウス氏が「大変名誉なことである。IWA の発展のために丹保会長の後、全力を傾けたい」と挨拶された。また、落選したソムリオディ氏からも挨拶あった。

d) 2008年 IWA 世界会議開催地域

開催地域は北アメリカ・メキシコ・パナマと北欧を含んだヨーロッパの2つの地域で電子投票が行われ29.3%と70.3%となりヨーロッパが勝った。そして、早速、オーストリアのウィーン市が立候補すると表明された。

e) IWA の定款・細則の改正

改正内容についてミルバーン博士より説明があり提案どおり承認。

f) IWA の戦略問題

IWA 戦略問題のひとつである各国国内委員会の会費（正会員の会費のこと）について審議された。その結果、最終的にライター専務理事以外に

オーストラリア、ニュージーランド、イスラエル、英国、フランスの理事からなるスタディ・グループによって正会員の会費を先に決めて、それから法人会員と個人会員の会費を決めてもらうことになった。

g) IWA 財政報告

IWA の2001年度の決算見込み及び2002～2004年度の収支計画について資料提出された。その内容について説明されてから理事会で審議された。2002～2004年度の収支計画では収入は法人会員の新規加入（110/年）とその会費を増額する内容になっていた。これに対してある理事は「法人会員の会費を増額すると脱退したり、新規加入が予想したよりも減ってかえって収入が減るのではないか」、「正会員の会費は開発途上国に対して低くなるようにしてくれないか」、反対に高い正会員の会費を払っている国は「このような理事会での投票権を2票にするようにしてもらいたい」といったような意見が出た。そこで正会員・法人会員・個人会員の会費については前述したように最終的に理事会のスタディ・グループでライター専務理事も含めて検討してもらうことで承認された。

なお、財政委員会の発足提案についてもこの理事会で承認された。提案された財政委員会は財務官（ラウス副会長）、理事会が指名した会員1名、及び会長会議で任命した民間の有資格会計士の3名から構成され、IWA の四半期の財務監査を主たる業務とする。

h) IWA 基金

IWA 基金の戦略については提案通り承認。その提案とは、「IWA の新しい戦略全体が見直されたことを受けて IWA 基金事業についても現在までの実績から今後は地域的なネットワークを構築して支援していく」といった内容である。

i) 京都フォーラム

IWA からはラウス副会長とライター氏、さらに丹保会長の代理として松井三郎京都大学大学院教授が3月22日にフランスのパリのユネスコで開催された京都フォーラムに関するテクニカルパネル会議に出席したのでその結果についてラウス副会長より、「今後、5～6の国際機関と提携して京都フォーラムの科学技術パネルを立ち上げるよ

うにしたい。また、この関連で、今年12月までに小冊子をつくることと、その中から大臣会議用に2～3の Executive Summary を出す。小冊子はメディアに配布したりして盛り上げていく。そのための最初の書類手続きを日本の第3回世界水フォーラム事務局に4月19日までにライター専務理事が行う予定。」と報告され承認。

#### j) 会長会議決定事項

会長会議で決定したのはIWA 役員の旅費規程を改定したことである。その詳細はすでに今年の1月7日にIWA から届いているので省略。

#### k) IWA の各種賞の表彰者

IWA メルボルン世界会議の開会式の項で表彰者を記述したので省略。

#### l) 他の国際機関との提携

IWA が他の国際機関と連携して事業活動している。その国際機関はWHO、世界銀行、UNESCO、UNEP、OECD、Stockholm International Water Institute、国際水工学会、国際灌漑排水委員会、国際固形廃棄物学会、World Water Council、Global Water Partnership (GWP)、Collaborative Council on Water Supply and Sanitation、International Council of Scientific Unions (ICSU)、Swedish International Development Agency (SIDA)、アジア開発銀行である。これ以外に南米の地域協会AIDIS、Union of African Water Suppliers (UAWs)、European Water Association (EWA)とも連携してきている。

#### m) IWA の出版事業

モーゲンス・ヘンツ教授は2001年には会報、書籍、オンライン情報提供の事業が相当拡大したので水と環境の大手出版社としてIWAPの地位は向上したと述べた。IWAPの2001年度の総収入は£2,172,000(約4億3,440万円)で純利益は£726,000(約1億4,520万円)をもたらした。

#### n) 世界会議の準備状況

今回のメルボルン世界会議、2004年マラケシュ世界会議の進捗状況について各会議会長から報告があった。残念ながら2006年北京世界会議については中国から誰も理事会に出席してないので報告はなかった。

## 4. CEO サミット

CEO (Chief Executive Officer - 最高経営責任者) サミット会議は4月8日(月)の午後1時15分から午後8時、さらに翌日の4月9日(火)は午前9時から午後8時までメルボルン展示場5階のクラレンドルームで開催された。

この会議には15カ国から39名が参加した。国別参加者の内訳は地元のオーストラリアから9名、フランスから5名、米国から4名、マレーシアとモロッコから2名、ザンビア、ニュージーランド、スウェーデン、香港、ポルトガル、スイス、イギリス、南アフリカ、ドイツから各1名で、我が国から名古屋市上下水道局の平子上下水道管理者、東京都水道局の鈴木多摩水道対策本部長と松井水道特別作業隊長、横浜市水道局の久保田次長、大阪市水道局の山田技術監、そしてオブザーバーとして竹中国際課長が出席した。参加者の顔ぶれは実に様々でフランスの民間水道会社である「ビベンディ」や「スエズ」のCEOや幹部、自治体の水道事業管理者や各国の水道協会の代表者などであった。

なお、CEO サミット会議に出席するにあたり200ポンド(約4万円)の登録料をIWAは徴収した。

今回のCEO サミットは前回のベルリンで決定した3つのテーマが決められていた。それらは開発途上国の水問題、持続可能な水道事業経営、水道事業の経営形態と規制(Developing Countries, Sustainability, Governance + Regulation)である。開発途上国の水問題については十分な時間がなかったこともあって途上国の水問題の概略が示されただけで、IWA がいかに途上国の水問題解決に係わっていくのかという議論はほとんどされなかった。マレーシアからの参加者は、途上国からの参加者がほとんどいないこのような場で議論しても無意味であるという意見が出たりしたので、前述したIWA が途上国の水問題にどのように関わっていくか今回出席の数人のボランティア・メンバーによって検討して次回に報告することになった。持続可能な水道事業については、最初にフランスのスエズのオンデオ社が用意した討議資料について質疑した。その内容は、次世代に負の遺産を引

き継がないために水道事業に関して1) 水道事業による水資源などの環境破壊を抑制する「環境的持続可能性」、2) 適切な水道事業コストの回収による健全な財政運営する「財政的持続可能性」、3) 水道事業を運営する組織の持続可能性の「組織的持続可能性」の3種類が重要であるということ。その後、引き続いて、上記1) の環境面に関するケース・スタディがストックホルム、シドニー、シアトルの3都市から報告された。水道事業の経営形態と規制については、IWA ワーキンググループがそれぞれの経営形態がよりよく機能するためにどのような条件が求められるか情報収集した結果が発表された。それによると公共側の関与が強い順に自治体モデル、公営企業モデル、水道に関する財産は公共側にあるままでサービスのみを民間に長期契約するコンセッションモデル、完全民営化モデルと4つの水道事業経営形態について考察し、何れのモデルも健康面、環境面の規制と一定の法による統治は必要としながらも公共の関与が強いほど市民サービス水準や水道料金体系、その他の水道事業を監視する必要があると結論づけた(図-1)。次回のCEOサミット会議はイタリアのベニスで11月24日(同地での11/21-11/22の会長会議後)、その後3月に大阪(第3回世界水フォーラム前)で開催予定。

5. Asian Water Qual Group と ASPAC 評議会のジョイント・ミーティング

Asian Water Qua と ASPAC 評議会のジョイントミーティングは世界会議中の4月10日(水)の午後0時30分からコンベンションセンターMCCの

ユー・ヨングス1ルームにて開催された。今回のジョイント・ミーティングの司会は広島大学の岡田教授がされ、まず自己紹介があつて早速次回来月10月にフィリピンのセブ島で開催するASPAC地域会議の進捗状況をフィリピン、それからタイのバンコックで開催する Asian Water Qual をタイから報告。その後2005年にシンガポールでは Asian Water Qual と ASPAC をジョイントして開催することが再度確認された。

その後、2007年の開催地の選考とジョイントによる名称をどうするかという議題になり、この件についてはASPAC側はフィリピン、Asian Water Qual は広島大学の岡田教授が担当してe-mailで情報をまとめ次回のこの会議でまとめる。しかし、シンガポールは今年末までに論文募集の First Announcement を出したいので名称だけは早く決めて欲しいとの発言があつた。

最後に、IWA のニック・キング基金局長から発言があり、IWA 基金活動は今後皆さん方の地域の国内委員会をフルに活用していこうと思っているのでよろしくとのこと。

6. 視察旅行の概要

今回のメルボルン世界会議で日本水道協会が編成した視察団は表-2の通りA、Bの2コースに分かれ4月6日(土)から同17日(水)まで「メルボルン世界会議・展示会出席及び各都市の水道施設などの視察旅行」を実施した。しかしながら、前回のベルリン世界会議から6ヵ月しか経過して

表-2 IWAメルボルン世界会議・展示会出席及び水道施設視察団

Aコース	Bコース
4月6日～4月12日	4月6日～4月12日
メルボルン市	メルボルン市
第3回 IWA 世界会議出席	第3回 IWA 世界会議出席
4月12日～4月13日	4月12日～4月16日
シドニー市	オークランド市、 クイーンズタウン市、 クライストチャーチ市
4月13日 帰国	4月17日 帰国
団長 平子魁人(名古屋市 上下水道局長)	団長 鈴木謙次(愛知中部 水道企業団経理課長)
副団長 横道保博(㈱クボ 九州支社鉄管課長)	副団長 橋本正治(川崎製 鉄㈱エネルギー水道事業部長)
参加者数20名	参加者数16名

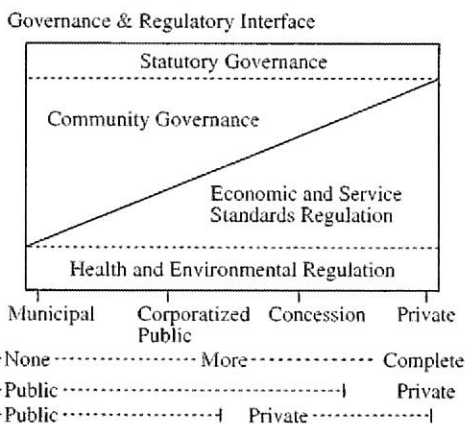


図-1 水道事業の経営形態と規制



いないことと、今回の世界会議の開催が我が国の新年度はじまったばかりの時期であったために参加申込者数がかんばしくなかった。

#### 7. あとがき

今回の第3回IWAメルボルン世界会議について、会議終了後丹保会長に聞いた。丹保会長は「メルボルンという比較的コンパクトな都市でアカデミックな関係者とユーティリティ及び企業関係者が相互にバランス取れた形でまとまって参加者相互のコミュニケーションも大変うまくいった良い会議であった。これまではどちらかというといふIAWQは学者の集まり、IWSAは水道事業者の集まりと勝手に定義してきたが両者が合併して3回目の世界会議となった今回は少し違ってきたのかなあと思う。ただ、自分の立場でしかものを言わないという悪い習慣はまだ残っている。こういった悪い習慣がなくなって一緒になって世界の水をどうしようかという話ができるようになってくるとすごいことになる。その半歩ぐらいは動き出した。それから今回のメルボルンのIWA役員会から各テーマ毎に小さなグループを作ってコンセンサスを得る会議スタイルを取り入れた。それからIWSAとIAWQがそれぞれ持っていたコアの評議会を戦略評議会に一本化した。」と言及された。このように今回の世界会議は丹保IWA会長のリーダーシップのもと、新しくIWAの専務理事と副専務理事なった元シアトル水道局(米国)のポール・ライター氏と元ブリスベン水道局(豪)のマーク・パスコ氏らが会議の運営をリードし、世界各国からの参加者からもその優れた会議運営が高く評価された。また、日本から参加した155名の出席者はもとよりアジアからの出席者も丹保会長を盛り立て日本の存在感を示した。

しかし、今回のメルボルン会議の反省点としては水道関係の国際企業、たとえばフランスのスエズやビベンディ、イギリスのチームズウォーターなどを全面的に表面に出て活動させたことである。このような傾向は1999年のプエノスアイレス世界会議以後顕著で、2000年のパリ世界会議、2001年のベルリン世界会議でも見られた光景であったが、今回は民間会社をあまりにも前面に出させ過ぎたきらいがあった。これまではそのような企業のトッ

プが壇上に上がって挨拶といったような光景は見られなかったが今回は4月5日(金)夜の会長招宴にスエズのオンディオ社、4月10日(水)のGala Dinnerにはチームズウォーターが壇上に上がって挨拶していた。このような光景に対して理事会などで世界会議のスポンサー企業が壇上に上がって喋ったりするのはおかしいのではないのではという意見が出たりした。同様な光景がCEOサミット会議でも見られた。10万円を越える会議参加費を払って、しかもディナーパーティーのお金も参加者が出しているのにもかかわらずである。これは私見であるが前述した世界会議を振り返って見ると世界の水道は大きな流れに乗って姿をかえようとしている。国際企業は、色々な機会を捕らえて売名行為だけでなくビジネスチャンスを広げようとしているように思える。

(以上)

#### 第3回IWA世界会議開会式 丹保会長挨拶

Distinguish guests, ladies and gentlemen,

I am greatly honored to have the opportunity to welcome all of you in the opening ceremony at this IWA 3<sup>rd</sup> water congress here in Melbourne. Many of you have traveled over one night from your home to here Australia, where southern cross shines. My special thanks go to those friends.

At the end of 20<sup>th</sup> Century, human population reached 6 billion. The world population is still growing. If people of the whole world wished the highest level of material life as the developed countries obtained at the end of 20<sup>th</sup> century, they say, we need two more globes.

Under this environment, we may have two choices for our future.

We will to seek another or other planets to immigrate.

We shall shrink our material and energy consumption to some extent as well as total population, in some extended period of time to get sustainability.

Maybe, combination of the above two ways is proceeding in the 21<sup>st</sup> century. Anyway, "sustainability"

is the key word on the earth in this new century.

We will not be able to anticipate growth of our human world, that we have experienced throughout modern centuries for more than 200 years. However, "active sustainability" will not be able to obtain by simple shrink of the human activity on the same mode of the modern period.

Of course, we do not have any "simple growth."

"Sustainability" and "growth" indicate opposite directions on the closing planet. Instead, sustainable development" is coming as key concept for the 21<sup>st</sup> century. The difference in between "growth" and "development" are very essential for us to be understood.

"Keeping sustainability, by reducing the use of materials and energy cleverly, decrease of human population as well," and "activating a human beings, by developing new cultures to open a new horizon to our future generation," are both requested at the same time today.

Water is an essential material for all activities on this planet. As the world moves into the 21<sup>st</sup> Century, we are facing two important issues, "how to maintain good sanitation and good water resource management in developing countries," and "how to provide a sustainability of water environment and safe water supply to all the people throughout the world." The 21<sup>st</sup> century is said to be the "Water Century."

We are the specialists of water. IWA is the key organisation of water people. In the first decade of this so called "Water Century," we are asked how our association respond to the demanding agenda for our future. Although any effort to meet these challenges are basically depending on the ideas and actions of willing individuals, concrete plans to organise this goodwill in an effective manner are also essential.

Although IWA is an extremely large international body merged by IWSA and IAWQ, cooperation with other organisations is also essential.

The 3<sup>rd</sup> IWA Melbourne Congress offers you opportunity to address these challenges. Delegates representing the full spectrum of the global community of water professionals, "those who scientists, engineers,

practitioners, consultants and manufacturers," are gathering at this important congress. Working together, through the exchange of knowledge and the explorations, you have the opportunity to lead the advancement of state-of-art by crafting new and innovative solutions to pressing challenges worldwide. We need young blood, strongly. Our older members, who ran IWSA, IAWQ, and now IWA for many years, are handling over the initiative to the next generation.

I hope you will enjoy the very special opportunity for learning and exchanging that the Melbourne Congress provides, as well as the beauty and spirit of Australia and her people.

Finally I should like to extend my sincere gratitude to the Australian host committee and London office of IWA, contributing to organise this congress after the years of hard works, and congress president, Dr. David Garman.

### 第3回 IWA 世界会議開会式 丹保会長挨拶(和訳)

ここメルボルンで開催される第3回 IWA 世界会議の開会式にご出席の皆様には歓迎のご挨拶ができることを大変光栄に思います。多くの皆様は、祖国から南十字星の輝くここオーストラリアまで、1晩以上の旅程を經過お越しいただいたことと思います。特にそうした遠方からお越しの方々には御礼申し上げます。

20世紀の終わりには、世界の人口は6億人に達しました。そして今なお増加を続けています。もし世界中の人々が20世紀終盤の先進国と同様の高レベルな物質文化を求めるならば、我々にはあと2つの地球が必要だという人もいます。

このような環境の中で、我々が将来のために採るべき選択肢は2つあると思われます。

1つは、移住するための別の惑星を探し出すことです。そしてもう1つは、資源やエネルギー消費、人口をある程度まで抑え、その間に持続可能な環境を見出すことです。

恐らく、21世紀に入って前述の2つのコンビネーションが進められていることと思います。いずれにせよ、持続可能性 (Sustainability) がこの新し

い世紀のキーワードです。

200年以上の近代文化を通して経験してきた通り、我々には人間社会の成長は予測できません。しかし、近年と同様の単純な人間活動の縮小だけでは、「積極的な持続可能性」を得ることはできません。

もちろん、我々には「単純な成長」はあり得ません。「持続可能性」と「成長」は、この1つの惑星において逆の方向性を示します。その代わりに、「持続可能な発展」が21世紀のキー・コンセプトとなります。我々はまず、「成長」と「発展」の違いを理解しなくてはなりません。

今日では、「資源とエネルギーの消費を賢く減らし、同様に人口を減らすことにより持続可能性を維持すること」と、「将来の世代に新たな地平線を切り開くため新たな文化を発展させることにより、人間の活動を活発化すること」の双方が同時に求められています。

水は、この惑星におけるすべての活動に欠くことのできない資源です。21世紀に入り、我々は、「開発途上国においていかにして公衆衛生と水資源管理を維持していくか」、また、「全世界の人々にいかにして持続可能な水環境と安全な水道を提供していくか」という2つの重要な問題に直面しています。

我々は水のスペシャリストです。IWAは水関係者にとって鍵となる組織です。いわゆる「水の世紀」の最初の10年間は、我々の将来のために必要な政策にいかにして応じていくかが問われます。これらの挑戦に対する取り組みは、基本的に協力的な人々のアイデアや行動によるものですが、そうした善意をとりまとめるために、効果的に計画を具体化することが重要です。

IWAはIWSAとIAWQの合併により設立された巨大な国際組織ですが、他の組織との協調も欠くことはできません。

第3回IWAメルボルン会議は、皆様にとってこれらの挑戦に取り組む絶好の機会となることでしょう。水のプロフェッショナルによる国際コミュニティのあらゆる分野からの代表者の皆様、「科学者、エンジニア、実務者、コンサルタント、製造者」がこの重要な会議に集結しています。知識

や調査に関する情報交換を通じてともに学び、世界的なチャレンジを推し進めていくための新たな、また革新的な解決策を生み出すことにより、最新技術の向上においてリードする絶好の機会となることでしょう。

我々は若い人材を強く必要としています。IWSA、IAWQ、そして現在のIWAを動かしてきた過去からのメンバーは次の世代にイニシアチブを託そうとしています。

学び、意見を交換するすばらしい機会を提供するこのメルボルン会議を、またオーストラリアの美しさや精神、そして人々とのふれあいを皆様に楽しんでいただきたいと思います。

最後に、数年にわたる多忙な職務を通してこの会議の組織に貢献してきたオーストラリアの組織委員会とIWAのロンドン・オフィス、また会議会長のDavid Garman氏に心から感謝の意を表します。

### 第3回IWA世界会議閉会式 丹保会長挨拶

It is my great honor and privilege to say a few words in this closing ceremony.

The third world water congress, here in Melbourne is over. It has been surely a very much successful congress in various dimensions the success owes greatly to Australian Host committee headed by Dr. David Garman participants.

We have done many trials to establish a new shape of our IWA since Paris congress. We have accumulated many successful fruits and some drawbacks since then. Clever use of these accumulated experiences, will bring us to create our new culture in our New IWA.

At any time, bottom up contributions from individual members and corporate members as well as national committees make our association healthy and mighty.

The New IWA is organizing regional net work systems to accelerate our activities and to support regions each other.

American Net Work, African Net Work, East Asia-

Pacific region Net Work and European Net Work are active. Some other net works are also establishing. Unfortunately, some area including Central Asia, Indian-Sub continent etc, etc are not so. We have to ask to those regions.

We are the world organization of Water specialists. We must work for the future generation on our planet. I dare say, again, "We need young blood, strongly." Individual profit or benefits are important, but, it can only be accepted as far as our sustainability is held correctly.

Two important issues, in our organization, come to my mind.

In order to carry our association, the way of saying;

1) "My world is your world" could be correct.

That means, you are always invited to our group or culture.

But reversely, "My way is your way" is absolutely incorrect.

2) End thing is Language.

Our official language is~ "English". I should like to ask your favor that, at any time 'please speak "S-lowly" and "Clearly" as possible as you can'.

There are many dialects even in "English speaking regions". Non-native speakers, some times, very much far from that. So that "Slowly" and "Clearly" are requested for both native and non-native English speaker in the international body.

Also, speaking in appropriate expression is requested to those who speak good sophisticated English in their home country. Both appropriate Technology and appropriate English are very much useful in the world wide organization.

Next 4<sup>th</sup> W. W. Congress will be held in Marrakech, Morocco, in Autumn 2004. This is the 1<sup>st</sup> W. C of IWA designed from its beginning by our New IWA. Clever use of accumulated experience through many meeting, and your voice to help from various parts would be make Maracckesh success fut.

Finally, I should like to extend my sincere thank to all of you coming to Melbourne Congress from all

over the world.

Special thanks are also given to Australian Host Committee and IWA London office, headed by Dr. Garman and Mr. Paul, respectively.

### 第3回 IWA 世界会議閉会式 丹保会長挨拶(和訳)

この会議を閉会するに当たって、一言ご挨拶を申し上げます。

ここメルボルンで開催されました第3回 IWA 世界会議が閉幕いたします。今回の世界会議は非常に大成功でありました。これもひとえにデビット・ガーマン氏を筆頭としたオーストラリア組織委員会及び関係各位のおかげでございます。

私たちは前回のパリ世界会議以来、IWA の新しい装いのために様々な試みを実施してきました。これまで、多くの成功も失敗も繰り返してきました。このような積み重ねの中から私たちの IWA に新しい創造がもたらされることでしょう。

また、国内委員会のみならず、個人会員及び法人会員の皆様からのお力添えによりまして、健全な運営がなされております。

新しい IWA では、我々の活動を促進し、お互いの地域を支援する目的で地域ネットワークシステムを組織しております。

アメリカ、アフリカ、東アジア-太平洋地域及びヨーロッパ間では、順調に稼働しております。他のネットワークでも、ある程度動いております。しかし、中央アジア、インド地域では、まだ動いておりません。私たちは、このような地域に対して地域ネットワークシステムを構築していかなければなりません。

我々は、水のスペシャリストの国際機関でございます。この地球を次世代に受け継いでいかなくはなりません。私は、「我々は、若い人材を強く必要としています。」ということをもう一度言及いたします。

個人が持っている知識や財産は、確かに大切ですが、それは持続可能性のあるものでなければなりません。

我々の組織にとって、二つの重要な課題があるということをご心に留めておいて下さい。

その1つは、「私たちの世界は、あなたたちの世界である。」ということです。この意味は、あなた方をいつでも私たちのグループや文化に迎えますということを行っているのです。決して「私たちのやり方が、あなたたちのやり方である。」ということではありません。

もう一つは、言語のことです。

私たちは、公用語として英語を用いております。そこで、私が皆様にお願ひしたいことは、できるだけゆっくり、明確に話してもらいたいのです。

英語を母国語として使用している方々の話し方では様々な方言があつたりします。また、英語圏でない方々にとっては、英語を理解するのは大変なことです。ですから、世界中で英語圏とそうでない方々との間で相互に求めることは、話をするときにはゆっくり、明確に話すことなのです。

また、明確な表現で話すことを求められるのは、特に母国で英語を話している方々です。技術と英語の両方を確立することは国際機関にとって非常に重要なことなのです。

次回第4回世界会議は、2004年秋にモロッコのマラケシュ市で開催することとなっております。これは第1回世界会議以来、IWAが発足した当初から予定されていたものです。今までの世界会議で積み上げられてきた実績を有効活用し、様々な形でご助力いただいでマラケシュ会議も成功させましょう。

最後に、世界各国よりメルボルン会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございました。

それから、オーストラリア組織委員会、ガーマン会議会長、ポール専務理事、それからIWAロンドン事務局関係各位にもお礼を申し上げます。